

2011年5月31日

街頭演説(東京・有楽町)

皆様こんにちは。自民党の谷垣禎一です。

今日は寒いですね。この寒い中、自民党の訴えに耳を傾けていただきまして心から御礼を申し上げます。

平成23年3月11日、大変なことが起こりました。確実にこの3月11日の前と後では、われわれのライフスタイルも変わってきます。おそらくこれから何年かたったら、私たちは次の世代に対して、あのときの前と後では日本はすっかり変わったんだ。こういうことを言っているのではないかと思います。それだけの大きな事件でした。

あの日、あの津波をテレビで見、現地にも5日間入り、「与党も野党もなく被災地を救援し、復旧復興のためにできる限りのことをしなければならぬ」こう思いました。

実は3月11日までは、私は口に出していったことはありませんが、菅さんが相当ふらふらしていたのは事実です。マニフェストも、無駄を省けばいくらかでも財源は出てくると思っていたけれども、なかなかそれも出てこない。政治主導だといきがってみたけれども、尖閣や何かの問題で、あれが政治主導かということになって、菅さんも3月11日の直前はふらふらでした。私は口には出さなかったけれども、この将棋、読み筋さえ過たなければ、必ずこれは詰めることができると、実は内心では思っていました。

だけど3月11日がおきた。私は考えかたをガラッと変えました。

まず最初に提案したのは、国会は一週間休戦だ。菅さん、国会のことなんか気にしないでいい。被災地の支援あるいは行方不明の方の救出。政府は全力を挙げてやってほしい。こう申し入れました。

そして、与党だけでは背負いきれないことがあるだろうから、野党も一緒になって国会の中に協議会を作って、それぞれ被災地に行ったらいろんな訴えを聞いてくる。それをぶつけ合って、各党協調してできる体制をつくろう。こういうことも提案してやりました。

また、私どもも阪神淡路あるいは中越いろんな経験がありましたから、自民党の中で議論をして、三回にわたって緊急提案を作って官邸に持って行きました。ずいぶん政府に使ってもらったのもありましたが、残念ながらこなしてもらえないものもありました。

そして、5月2日に成立した第一次補正予算、これは瓦礫の処理とかあるいは仮設住宅の建設です。財源はわれわれには納得できないものがありました。基礎年金に三分の一しか税金が入っていないのを二分の一まで入れることにして年金を安定させようとしていた、その財源を震災に使うというから、ちょっとそれはどうかということで、その財源を認めるのはわれわれの今までの理屈からは矛盾がありました。矛盾はあったけれども、瓦礫の処理や仮設住宅に反対するわけには行かないということで賛成をしました。これが5月2日

です。

しかし、しかし、もう駄目だと私は思います。もう、この菅さんの政権に任せていたら、日本の復興は絶対に成就しない。私は今このように思っています。

なぜそうなのか、昔から「信なくば立たず」という言葉があります。政治が進んで行くためには信頼が必要です。菅さんに信頼があるのか。

たとえば外国から見たら、いいですかアメリカはわれわれの同盟国です。震災直後も、「友達作戦」、あの仙台空港がガタガタにやられたのを、米軍が重機を持ってきてあつという間に直してくれました。もういろんなことを助けてくれました。そのアメリカから菅さんなんと言われたのか。アメリカに行くと言ったら9月まで来ないでいいと言われたのです。いままで日本の総理大臣で同盟国からこんな扱いを受けた人がいたでしょうか。

国内からも信頼を受けているか。菅さんが総理大臣になってから、民主党が選挙で勝ったということはほとんどありません。一度もないというのが正しい。連戦連敗です。国民が見放しているのです。見放す原因はいろいろあります。あの尖閣の処理はなんだったのか。メドベージェフが北方領土に行ったのはなんだったのか。韓国の国会議員が北方領土へ行った。何だったのか。それを首脳会談でも言いもしない。これは日本の主権を守るということを菅さんは本当にやれるのか。みんなが信頼を失っていると私は思います。

さらに、外国とか国民だけではありません。官僚機構からも信頼を失っています。こういう震災復興などをやるときに政治家だけがいくら頑張ってもできるはずがありません。実動部隊が動かなければだめです。官僚機構も動かなければいけない。地方の市町村の役所も動かなければいけない。ところが怒鳴りつけてばかりいて、政治主導だということで官僚の知恵をきちっと評価して活かすことができない。だから官僚も信頼をしていない。だから、物事が、政策が進んで行かないのです。

では、党内からは信頼されていますか。党内からも信頼されていません。みんな、「菅さんじゃだめだ、何とかやめてくれないかなあ。だけど総理大臣が残ると頑張ったら引きずりおろす道はないなあ。」まるで東条内閣の末期ですよ。東条さんではこの戦線は解決できない。だけど辞めさせられないから、近衛さんもみんな動いたがなかなか代えられなかった。そういう状況になっている。あの参議院議長の西岡さん。民主党、与党の出身ですよ。この議長が、「菅さん辞めろ」と異例のことをおっしゃっている。中には議長がそんなことを言うべきではないとの議論もあるけれども、おっしゃっていることの中身は、私はほとんど賛成です。

このようにあらゆるところから信頼を失い、復興しようと思ってもできない。原発の処理の初動なんてひどかったと思いますよ。日本がもう一回世界の国から信頼を回復する道はなんなのか。今、ありがたいことに世界中の国から日本に対する同情が集まっています。日本国民は本当に立派だ。あれだけのひどい災害に遭いながら、みんな取り乱すことなく、けなげに頑張ろうとしているじゃないか。ああいう日本人を助けなくてどうなんだ。世界

中にこういう声が満ち溢れていることを私は本当にありがたいことだと思います。

しかし、そういう声があるその一方で起こってきているのは、どうも政権はおかしいね。日本は隠蔽体質ではないかという昔から疑念があったけれどもそれが出ているのではないか。原発処理も、本当はメルトダウンが起こっているんじゃないかと思ってはいたけれども、最近になってやっと認めました。それから注水するとか何とか言っているけれども、あの答弁の迷走ぶりはどうですか。斑目安全委員長なんて、「私はいったい何だったんでしょうか」なんていうセリフまで吐く始末ですよ。全く初動はなっていない。

それはなぜか。結局、菅さんが、ここから先は私はやや言い過ぎだと思いますよ、だけと言います。菅さんが独裁者だからです。菅さんは国会の質問でこういうことを認めた。「民主主義というのはある期間独裁を認めることだ」菅さんはこう言ったんですよ。菅さんが言う政治主導というのは期限付きで独裁を認めろということ。だから、浜岡の原発、何の権限もないのに民間企業に原発を止めろと言った。拍手喝采をする人もいるでしょう。だけど、「私はそういう権限があるわけではない。そういう要請をしたんだ」といって、責任をとらないわけです。あの浜岡の原発を止めた。拍手喝采する人もいました。安心という点からはあるいは良かったかもしれない。だけれども、この影響をよく考えなければいけません。東電は確かに電力が不足する。東北地方もあれだけの被害があったから、東北電力は非常に苦しい。だけれども中部電力は何とかやれるだろう。九州電力だって中部電力から三十万キロワットか四十万キロワット融通を受けることになっていたのです。ところが浜岡が止まったらそれができません。東京の東電の管内で操業を続けていた企業が、東電の管内では、あるいは停電になってしまって安定した創業ができないかもしれない。だから九州に生産の主力ラインを移そう。こういうことがあったのです。ところが浜岡でこうなると、九州に主力生産ラインを持っていくことも心配だということになってきた。そうしたらどうなるのか。九州ならいいですよ。これが中国へ行きベトナムへ行き、日本は空洞化ということになりはしませんか。つまりそこまで考えて決断をしたのか。そこまで考えて決断したのなら、あの浜岡のことを言う時に、「ほかのところは保安院が責任をもって絶対大丈夫だ。だけど、東海地震の一番近くにある浜岡だけは一回止めさせてくれ。ほかは国家が責任を持つ。」このセリフをなんで言わなかったのか。各地の知事さんたちは困っていると思います。原発というのは定期健診が入るんです。定期健診で止まった後、動かすのには知事の許可が必要です。国家が責任を持つと言ってくれなかったら、知事さんたちはどうやって「OKですよ」と言ったらいいのか。こういう日本全体のことを考えない政治運営をしているのは、責任がないんです。そして、責任がないことを内閣総理大臣だからといってやってしまう。こないだはサミットでフランスへ行き、一千万戸太陽光のパネルを作るといいました。ところが経産大臣はそんなことは聞いていなかったといって、記者会見で悔しそうに絶句してしまったんです。なんでこういうことが起こるのか。菅さんが政治というものは、中には総理大臣がトップダウンでバンと決断しなければならないこともあります。みんなで議論して、みんなで積み上げてやっていかず、あらゆること

に自分が英雄になり、自分が目立つために法を無視し、権限を無視し、責任を無視して独断でやっていたら、民主主義は崩壊してしまう。だから、私は菅さんのこの独裁の弊害が今や日本政治、日本社会を毒するに至っている。このように申し上げざるを得ない。このように思っております。

先ほども申しあげたように、いまは東条内閣の末期みたいだと言いました。菅さんが頑張ると言っただれも代えられない。そんな評論家みたいなことを私ども政治家が言うわけにはいきません。私どもは、頭数からいったら衆議院で民主党は 300 以上あり、自民党は 100 ちょっとしかありません。だけれども、これだけ日本社会に害毒を流し、日本の復興を少しも前に進めることのできない総理大臣に対して勝負を挑んで行くのは、私は野党の責任だと思っております。私どもは必ずこの責任を果たしてまいります。

先ほど申し上げたように、平成 23 年 3 月 11 日、必ず将来私たちは、私たちの次の世代にあのときで日本は変わったと思うと思います。問題はその時に、あれですっかり日本はダメになってしまったと、次の世代に言わなければならないのか、それとも、しばらくは苦しい時代が続いたけれども、日本人はみんなで頑張って、結局またいい国を作ったんだと言えるかどうか。それは今、ここに立っている私どもの世代に責任はあるのだと、私は思います。

自民党も反省しなければならないところがたくさんあります。私どもがもう一回自らを鍛えなおさなければいけないところがたくさんあります。しかし、私が必ずやらなければならないと思っていることは、私たち自民党がこれまで長い間皆さんに政権をとらせていただいて、経験を積ませていただいた。知恵もそれなりに獲得させていただいた。この経験と知恵をもとに、日本人が頑張って苦しい中だけれども結局はいい国にしていくその先頭に自由民主党が立たなければいけない。私はこのように思っております。私は、不肖私は、その先頭に立って頑張る覚悟でございます。

どうぞ、今日お集まりの皆さま、そういう自由民主党に暖かいご支援をいただき、またお眼だるいときはご叱声もいただいて、私どものこの志を果たさせていただきますようにお力をお貸しください。心からお願いをいたしまして、私からのお訴えといたします。どうもご清聴ありがとうございました。